

2010年5月2日

メッセージ概要

# 天声教会 1部礼拝 週報

〒231-0058 神奈川県横浜市中区弥生町 2-17 ストークタワー大通り公園 I -201  
TEL/FAX 045-326-6211

## 礼拝プログラム ※主の導きにより変わる事があります

御言葉と霊の祈り	Faith97 vol2 #7
賛美	頼れる主(Faith97 vol2 #8)
使徒信条	会衆一同
交読文	44
祈り	
メッセージ	栄光の家系の女達 - ラハブ(ヨシュア記2章)
祈り	
賛美	聖なる火(Faith97 Vol.1 #7)
主の祈り	会衆一同
祝福の祈り	メッセンジャー
報告	

## 祈祷課題

- ・この教会が神の御声を聞いて御心を行なう教会となるように
- ・病、貧しさ、悲しみの内にある兄弟姉妹のために
- ・兄弟姉妹達がキリストの香りを豊かに世に放ち、仕事、事業が祝福されるように
- ・奉仕者が与えられるように: 礼拝準備、賛美リード、奏楽

## 祝福の御言葉 自分にあてはめて祈りましょう

あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。(1ペテロ 2:9,10)

もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜まず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。(ローマ 8章)

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。(マタイ 7章)

ラハブは遊女であり、自分の身を売りつつ城塞の町エリコで生活していた。好んで売春婦になる女性はいないし、子供が将来なりたいと思うような職業でもない。彼女も裕福な家に生まれた訳ではないし、特殊な能力や外見を持っているわけでもない。城壁の壁を利用した粗末な家で生活し、来る日も来る日も、欲望に駆られた男達に体を差し出しては報酬を得、それを家族の元に持っていくという生活をしてきた。色々な男達が彼女の元に来ては去って行ったが、生活が良い方向に変わっていく訳ではないし、彼女の仕えていた神も、良い影響を及ぼしてくれた訳でもない。そんな中、彼女はある不思議な民族のうわさを聞いていた。その民族は神の民と呼ばれ、海の中を渡り、エジプトを滅ぼし、水も食物も無い荒野で40年もの間超自然的に養われて増え、川向こうの強力な王達を滅ぼしたという。そんなある日、二人の男が彼女の所に訪れた。その男達は今まで出会った男達の誰とも違って、分別と秩序があり、遊ぶためというより、何か任務を負っているようであったので、直感的に、この者達こそ神の民だと悟った。その者達を捕らえる為に兵士達が戸を叩いた時、彼女はとっさに、どうしたか。彼女は彼らをかくまい、あわよくば神の民に加わって生き延びようという判断を下し、急いで屋上に連れて行き、穂の束の間に隠し、しかも危機が去った後、彼らと交渉をする。彼らは真っ赤な紐の目印を家の窓につけておき、その中でじっとしているよう指示する。彼女は、「お言葉どおりにいたしましょう」と言って、その通り行動した。エリコは実際にその後、滅ぼされる。7人の祭司が7日間、その町の周りをめぐり、7つの角笛が鳴り響いた時、城壁は崩れ、赤い印の内側にいた少数の人々は、かの2人の男によって安全な所へと導かれた。世の終わりの時も、同じ事が起こる。御使いが7つのラッパを吹き鳴らす時、この世のものは火によって終わり、新しい天地が現れ、自分が築いてきた城壁に頼ってきた者達は、その城壁に押しつぶされ、木や草、藁で立てられた家は焼かれ、金銀で作られた器だけが残る。神の民のうわさを聞いた時、彼らを受け入れ、自分の救いを交渉した者は幸いである。7つのラッパが鳴り響く前に、イエスの血という赤い印の内側に逃げていない者は滅ぼされ、赤い印の内側にいた者は御使いによって安全な所へと導かれるのである。

ラハブは後にサルモンという男性と結婚し、ボアズ、すなわちルツの夫を生む。ラハブの義理の娘がルツであるという事実は意外と知られていないが、それはヨシュア記とルツ記の間の士師記、すなわち、好き放題には罰を受ける世情のどさくさの為だ。恐らくラハブは息子のボアズを育てる際、外国人であり、しかも遊女であった自分が、如何に救われ、信仰を堅く守る事が如何に大切であるかを、教育してきたことだろう。それだから、ボアズは神様に祝福され有力者となり、モアブ人ルツに優しく対応し、ついにはルツとボアズは結婚したのである。私達は、世のどさくさ、神の民のどさくさは置いておいて、信仰の家系を静かにしっかりと守り、築いていきたいものである。